

【 復活のトロパリ 第3調 】



てんにあるものたのしめよ、ちにあるもの  
天在者樂、地在者

よろこべよ、しゅはそのひぢのちからをあら  
悦主其臂力顯

わして、しをもってしをほろぼし、ふ復  
死以死滅

くかつのはじめとなあり、われらをぢごく  
活首我等地獄

のはらよりすくうい、せかいにおおいな  
腹救世界大

るあわれみをたまいたればなり。

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】



しととひとしくどうざなるもの、ちゅう  
使徒等同座者、忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい  
實神智役者、聖

なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい  
神撰笛愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう  
満器我國光

しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ  
照お者、亜使徒主教聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および  
爾羊群爲及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい  
全世界爲生命賜聖

さんしゃにいのりたまえ。  
三者祈給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこおとせいしんにき  
光榮父子おと聖神歸

す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが  
成聖者亞使徒聖我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ  
國爾旅人及異邦人受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの  
爾初我國於己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの  
外來者知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて  
光暖かきながし、爾敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか  
屬神子爲あし、彼等神

みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて  
 恩寵 與 教 會 建  
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり  
 今 此 教 會 爲 祈  
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん  
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾  
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
 呼 我 善 牧 者 慶  
 べよ。

【 復活のコンダク 第3調 】

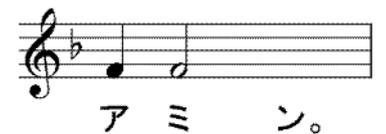
いまあもいつもよよおに、アミン。  
 今 何 時 世 世  
 じれんなるしゆよ、なあんぢは いまはかよりふ  
 慈 憐 主 爾 今 墓 復  
 くか つして、われらをしのもんよりのぼせ  
 活 我 等 死 門 升  
 たま えり。いまアダムはたのしみ、  
 給 今 樂  
 エヴァはよろこおび、しよよげんしゃはれつそとと  
 歡 諸 預 言 者 列 祖 偕  
 もにたえずなんぢのけんぺえいのしんせい  
 絶 爾 權 柄 神 聖



なるのうりょくをほめうとおおう。  
能力讃歌

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と  
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
ねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくいためつうかい  
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讃榮を奉るに堪うる者と  
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ  
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる  
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
に、



アミン。

【 聖三祝文 】



なるじょうせいのものよ、われらをあわれ  
常生者我等を憐  
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
聖神聖勇毅  
せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ  
聖常生者我等を憐  
れめよ。こうえいはちとことせいしん  
光榮父子聖神  
にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
歸今何時世世  
せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ  
聖常生者我等を憐  
れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう  
聖神聖勇  
き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
聖常生者我等を  
あわれめよ。

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 )

【 提綱 主日第3調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>わ かみ うた うた</sup> プロキメン、我が神に歌い歌えよ、<sup>わ おう うた うた</sup> 我が王に歌い歌えよ、

わ が か み に う た い う た え よ 、 わ が お 王  
我 神 歌 歌 我 王  
う に う た い う た え よ 。  
歌 歌

誦經) <sup>ばんみん て う よろこび こえ もつ かみ よ</sup> 萬民よ、手を拍ち、歡の聲を以て神に呼べ、

わ が か み に う た い う た え よ 、 わ が お 王  
我 神 歌 歌 我 王  
う に う た い う た え よ 。  
歌 歌

誦經) <sup>わ かみ うた うた</sup> 我が神に歌い歌えよ、

わ が お う に う た い う た え よ 。  
我 王 歌 歌

【 <sup>アポストロス</sup> 使徒經 200端 ガラティヤ書1章11節~19節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと じん たつ しょ よみ</sup> 聖使徒パヴェルがガラティヤ人に達する書の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい われなんぢら つつ わ たつ ふくいん ひと よ あら けだしわれひと これ う</sup> 兄弟よ、我爾等に告ぐ、我が傳えし福音は人に由るに非ず。蓋我人より之を受け、

<sup>これ まな あら すなわち もくし よ なんぢら わ さき</sup> 之を學びしに非ず、乃 イイスス ハリストスの黙示に由るなり。爾等は我が先にイウデ

<sup>きょう あ と き おこな ところ き すなわちわれはなはだ かみ きょうかい きんちく これ</sup> ヤ教に在りし時に行いし所を聞けり、即我甚しく神の教會を窘逐し、之を

<sup>ざんがい かつ きょう しんぼ わ どうぞく うち としあいひと おお ひと こ きわ</sup> 殘害し、且イウデヤ教に進歩して、我が同族の中の年相若しき多くの人に越え、極

<sup>せんぞ いでん ねつちゆう しか わ はは はら われ える そのおんちよう もつ</sup> めて先祖の遺傳に熱中せり。然れども我が母の胎より我を簡びて、其恩寵を以て

われ め かみ よろこ そのこ わ うち あらわ われ これ いほうじん ふくいん  
 我を召しし神が、悦びて、其子を我が内に顯し、我をして之を異邦人に福音せしめ  
 んとせし時、我直に血肉と相謀らず、亦イエルサリムに上りて我より先に使徒と爲り  
 し者を見ず、乃アラヴィヤに往き、後亦ダマスクに返れり。嗣ぎて三年を越えて、ペト  
 ルを見ん爲にイエルサリムに上り、十五日間彼と偕に居たり。他の使徒は、主の兄弟イ  
 アコフの外、誰をも見ざりき。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。あなたがたに、はっきり言うておく。わたしが宣べ伝えた福音は人間によるものではない。わたしは、それを人間から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示によったのである。ユダヤ教を信じていたころのわたしの行動については、あなたがたはすでによく聞いている。すなわち、わたしは激しく神の教会を迫害し、また荒しまわっていた。そして、同国人の中でわたしと同年輩の多くの者にまさってユダヤ教に精進し、先祖たちの言伝えに対して、だれよりもはるかに熱心であった。ところが、母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになったかたが、異邦人の間に宣べ伝えさせるために、御子をわたしの内に啓示して下さった時、わたしは直ちに、血肉に相談もせず、また先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出て行った。それから再びダマスコに帰った。その後三年たってから、わたしはケパをたずねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間、滞在した。しかし、主の兄弟ヤコブ以外には、ほかのどの使徒にも会わなかった。

\*\*\*\*\*

【 アリルイヤ 主日第3調 】

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) <sup>しゅ われなんぢ たの ねが われよよ はぢ え</sup> 主よ、我爾を恃む、願わくは我世世に羞を得ざらん、

ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、  
ア                      リ ル イ ヤ 。

誦經) <sup>わ ため けんご かくれが われ つね かく え たま</sup> 我が爲に堅固なる避所となりて、我に常に隠るるを得しめ給え、

ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、  
ア                      リ ル イ ヤ 。

司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ</sup> 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

<sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup> 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書30端 7章11~16節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup> 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、

なんぢの し んにも 。  
爾 神

司祭) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup> ルカ傳の聖福音經の讀、

しゅよ 、 こう え い は なんぢに き し 、 こう え い  
主 光 榮 爾 歸 光 榮



は なんぢに き す 。  
爾 歸

司祭) 謹<sup>つつし</sup>みて聴<sup>き</sup>くべし、彼<sup>か</sup>の時<sup>とき</sup> イイス、ナインと名<sup>な</sup>づくる 邑<sup>まち</sup>に往<sup>ゆ</sup>けるに、其<sup>その</sup>門徒<sup>もん</sup>の多人<sup>たにん</sup> 及び衆<sup>おほ</sup>

く<sup>たみ</sup>の民<sup>かれ</sup>は彼<sup>とも</sup>と偕<sup>ゆ</sup>に行<sup>まち</sup>けり。邑<sup>もん</sup>の門<sup>ちか</sup>に近<sup>とき</sup>づきし時<sup>かしこ</sup>、彼<sup>ししや</sup>處<sup>か</sup>に死者<sup>い</sup>の昇<sup>いだ</sup>き出<sup>は</sup>さるるあり、母<sup>は</sup>の

獨<sup>ひとり</sup>の子<sup>こ</sup>にして、其<sup>その</sup>母<sup>は</sup>は 養<sup>やもめ</sup>なり、邑<sup>まち</sup>の民<sup>たみ</sup>多く彼<sup>かれ</sup>と偕<sup>とも</sup>にせり。主<sup>しゅ</sup>彼<sup>み</sup>を見て、憫<sup>あわれ</sup>みて、彼<sup>かれ</sup>

に謂<sup>い</sup>えり、哭<sup>な</sup>く勿<sup>なか</sup>れ、乃<sup>すな</sup>わちちか 近<sup>ひつぎ</sup>づきて、櫬<sup>ふ</sup>に觸<sup>か</sup>れたれば、昇<sup>もの</sup>く者<sup>とどま</sup> 止<sup>かれい</sup>れり、彼<sup>わかき</sup>曰<sup>い</sup>えり、少<sup>わかき</sup>

者<sup>もの</sup>よ、爾<sup>なんぢ</sup>に謂<sup>い</sup>う、起<sup>お</sup>きよ。死者<sup>ししや</sup>起<sup>お</sup>きて坐<sup>ざ</sup>し、且<sup>かつ</sup>言<sup>い</sup>えり、イイス之<sup>これ</sup>を其<sup>その</sup>母<sup>は</sup>に與<sup>あた</sup>えたり。衆<sup>しゅう</sup>

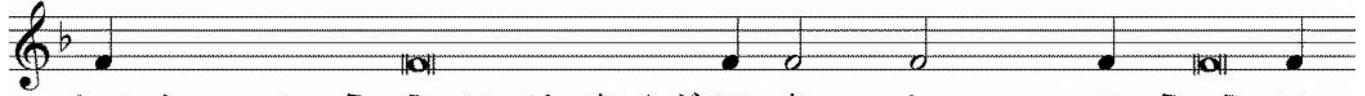
皆<sup>みな</sup>懼<sup>おそ</sup>れて、神<sup>かみ</sup>を讚<sup>さん</sup>榮<sup>えい</sup>して曰<sup>い</sup>えり、大<sup>い</sup>なる預<sup>おおい</sup>言<sup>よげん</sup>者<sup>しや</sup>は我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>の中<sup>うち</sup>に興<sup>おこ</sup>れり、神<sup>かみ</sup>は其<sup>その</sup>民<sup>たみ</sup>を眷<sup>かえり</sup>

みたり。

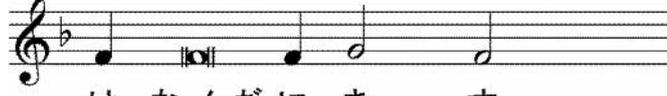
\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) そののち、間もなく、ナインという町へおいでになったが、弟子たちや大ぜいの群衆も一緒に行った。町の門に近づかれると、ちょうど、あるやもめにとってひとりむすこであった者が死んだので、葬りに出すところであった。大ぜいの町の人たちが、その母につきそっていた。主はこの婦人を見て深い同情を寄せられ、「泣かないでいなさい」と言われた。そして近寄って棺に手をかけられると、かついでいる者たちが立ち止まったので、「若者よ、さあ、起きなさい」と言われた。すると、死人が起き上がって物を言い出した。イエスは彼をその母にお渡しになった。人々はみな恐れをいだき、「大預言者がわたしたちの間に現れた」、また、「神はその民を顧みてくださった」と言って、神をほめたたえた。

\*\*\*\*\*



しゅよ、こうえいはなんぢに き し、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 光 榮



は なんぢに き す 。  
爾 歸

※聖体礼儀③ (金ロイオアン聖体礼儀) へ